

## 二、人間のあるべき姿

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらしあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。（創世記二章七節～九節）

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。

「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」（創世記二章一五節～一七節）

いわゆる「エデンの園」の物語です。少し注意して読むと、先程の一章とは、神の呼び名が違うことが分かります。「神」と「主なる神」の違いです。いうまでもなく、原語のヘブル語が違うのです。聖書学者によると、やはり書かれた時代背景が違うようです。こちらは、一章よりは古く、ダビデ、ソロモンという、イスラエルの歴史では最高の繁栄の時代（紀元前一〇世紀頃）とされています。新約のマタイによる福音書にあるイエスの山上の説教で、「栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」（マタイによる福音書六章二九節）とイエスが言われた、あのソロモンの栄華の時代です。

当時の人々は、高度経済成長に酔っていたかも知れません。もっともソロモンの晩年は、人々が重税にあえいでいた、と言われますが、好調の時代は、わが国のかつてのバブルの時代のように、なんでも楽観的になり、遊びや旅行などといった自分たちの欲や願望の実現に夢中になったり、なんとはなしに放漫な雰囲気か漂っていたのかも知れません。創世記二章、三章、四章は、人間の罪の問題や楽園追放の物語となっています。楽観的傾向に対して、人間の悲観的な部分を示して警告しようとしたのでしょうか？

私は、この二章のエデンの園の物語は、「人間のあるべき姿」を表現していると思います。

九節の「命の木」と「善悪の知識の木」の生えている「園の中央」は、「神の領域」であり、言葉を変えれば、「人間の限界」を示しているように思います。つまり、人間の命と善悪の知識には、限界がある、ということです。この限界をしっかりと受け入れて生きることが人間らしく生きることになるのに、人間は「不老不死」、「全知全能」を求め続けています。

一七節で、神が「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と命令されたと書いています。一見、意地悪な命令のように聞こえます。

蛇にだまされて結局、この命令に逆らうことになるのですが、そこには、「女を見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた」（三章六節）と書いてあります。このような木を置いておいて、「これは食べるな」と命令されても、誰でも興味をそそられるのは、当たり前だとも言えるでしょう。そこをずるがしこい蛇に付け込まれた、と言ってもいい

いと思います。

しかし、私は、この箇所は、人間の悲劇の原因は、すべて人間にだけある（他の動物にはない）「善悪の知識」にある、ということを中心している、と思うのです。神様の命令の真意は、「お前たちには、究極の善悪の判断なんか出来ないぞ、本当に何が良いか悪いかは、私にだけしか分からないのだから、私に聴きなさい。そうでないと死を生み出す悲劇に遭うぞ」と警告されたのだと思っています。

人類の文明の歴史は、一万年くらいと言われますが、この一万年の歴史は、戦争と差別に明け暮れていましたし、今もそうです。これまでの戦争で、「正義の戦」でなかったものがあるでしょうか？現代のアメリカとイラクの関係を見てもそれがよく分かります。どちらにも「正義」があるのです。「神様、どちらが本当でしょうか？」と神様に尋ねる謙虚さがなければ、どうしても戦争になってしまいます。「善悪の知識」は、人間固有のものです。幸福と不幸に分ける考え方は、善悪の知識があればこそ起こります。我が家の愛犬、チコ（マルチーズ）を見てみると、そのことがよく分かります。彼女は、我が家にいることを幸福だとも不幸だとも考えてはいないようです。自然そのものなのです。飼い主だけが、この家に飼われていて幸せだろうと思っただけなのです。「善悪の知識」というのは、口語訳では、「善悪を知る木」となっていますし、岩波書店から出された聖書においても、「善悪を知る木」と訳されています。私は、個人的には、この訳の方がいいような気がするのです。というのは、人間だけが、善と悪、幸福と不幸、美と醜の区別をつけることができるからです。

その結果、人間だけが「比べる」ことになります。つまり、あるがままを受け入れることができない、あるいは困難にさせるのです。そして、区別することが「差別」を生みます。史上最大の差別事件が、あのヒトラーによるユダヤ人大虐殺だった、と言ってもいいと思います。ドイツ民族だけが、世界最高の優秀な民族で、汚れた人種は抹殺せよ、という論理がまかり通ったのだ、と思います。

人間は、本来、「差別」するものなのだ、ということはこの物語は伝えています。だから、あきらめる、というのではなく、差別の根源は、何なのかをしっかりと見つめなければならない、ということです。「私は差別なんかしたことはありません」と断言できる人は一人もいないのです。

二章は、

人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。（創世記二章二五節）

という言葉で結ばれています。つまり、「善悪の知識」の限界を受け入れている限り、互いに比べることをしなかった、あるがままを受け入れていた、ということです。これが「あるべき姿の人間」なのです。その「命」と「善悪の知識」の限界を受け入れて生きられたのが、イエス・キリストだった、と私は信じています。

わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。（ヨハネによる福音書一四章六節）というイエスの言葉は、そのことを示している、と言ってよいと思います。本来、究極的な善悪の判定は、人間には不可能であるにもかかわらず、究極の判定者である神をさしおいて判定を下すことを、「罪」といいます。この「罪」と

いう字は「犯罪」の罪が使われているため、法律的、道徳的違反と受け取られがちですが、「罪」と訳されている言葉のもともとの意味は、「的を射はずす」ということでした。従って、簡単に言うと、「神を無視した見当違いな判断」ということになります。神だけが判定される善悪の判定を人間が下して、神との関係を切ってしまうことを「罪」というのです。道徳や法律とは関係がありません。「小さな親切、大きなお世話」が意味していることと似ています。「親切」は、道徳上は「よいこと」に違いありませんが、押しつけがましい親切は、かえって迷惑になります。

つまり、「罪」は、「行為」の問題ではなく、神との「関係」の問題なのです。道徳や法律は「行為」を問題にします。聖書で言う「罪」は、「関係」を問題にしているのです。そのことをよく表わしている新約聖書の言葉があります。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。(フィリピの信徒への手紙二章六節～八節)

そして、クライマックスは、十字架上でのイエスの言葉に示されています。

三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。(マルコによる福音書一五章三四節)

これは、詩編二二編一節の祈りなのですが、イエスが普段よく詩編で祈っておられたことが想像されます。イエスの十字架での最大の苦しみは、人に見捨てられただけでなく、神に見捨てられたことだったと思います。呼んでも呼んでも答えてくださらない神、命がけで指導した弟子たちは、何も分かっていないばかりか、イエスを裏切っている、なんとか悔い改めて欲しいと願っていた当時のユダヤ教の指導者たちは、益々誇り高ぶっている、こういう状況では、自分のしてきたことは何だったのか、分からなくなって自暴自棄になっても無理はない、と思います。

しかし、イエスは、「天はわれを見捨てた」と結論づけるのではなく、「どうしてお見捨てになったのですか」と神に問い掛けられる。これが、「死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」ということでしょう。そして、ここまでの従順は、人となられた神でなければ決して出来ないことです。これが「旧約を完成する」(マタイによる福音書五章一七節)というひとつの側面でした。イエスは、「善悪の知識」の木からは決して取って食べることはなさらなかったのです。

創世記二章は、「あるべき人間の姿」を示している、と申し上げましたが、まず、そのような人間としてイエス・キリストが生きられた、ということをご理解いただけたでしょうか。では、私たちはどのように生きればよいのでしょうか？そのことをも、この章では教えています。

人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。(創世記二章二五節)

比べないで、あるがままを受け入れて生きる、ということです。人間は、善悪の両面を知っています。だから、「良い」ということの追求だけで終わってはならない、悪いという側面にも目を閉じてはならない、ということです。昔、見た「知ってるつもり」という番組で、道元禅師の言

葉が、現代語に翻訳されて紹介されていました。

「この世にあるすべてのものには二つの面がある  
光のあるところ、必ず影あり  
生があるものは 必ず死す  
富に対して 貧しさがあ  
り  
ことの善悪もまたしかり  
つねに一方にこだわらず、片寄らず  
つねにあるがままに認める境地に到るためにこそ修業がある」

そうなのです。どんな人にも両面がある。長所は、裏返せば、欠点です。早いというのが長所であれば、それはオッチョコチョイ、早とちりという欠点にもなります。欠点をおさえて長所を伸ばす、ということは不可能なのです。長所もおさえることになるからです。私は、ときどき、相談を受けている時に、

「つくづく自分の性格がいやになりました。なんとかならないでしょうか？」  
と言われることがあります。私は、その時、こう質問します。

「あなたは、その性格で、損ばかりしてきましたか？」

たいがいの方は、ニッコリして帰ります。

余語翠巖さんという高齢の禅宗のお坊さんが、こんなことを言っています。

「釈尊が悟りを開いたとき、『我と大地有情（うじょう）と同時に成道（じょうどう）せり』という言葉が発した。『同時に』というのは『いつでも』ということ。過去、現在、未来、いつでも成道すということは、過不足なくそこにあるということに気づくということじゃね。人間は生まれたまま過不足なくそこにある。ところが人は過不足ないどころか、足らん、足らんばかりで生きている。」（「名僧いんたびゅう」、産経新聞社、一九九三年四月三〇日、初版、221～222頁）

現代人は、良いこと追求で必死です。健康によいこと、将来の安定によいこと、人間関係によいこと、成績によいこと、……こうなると、その反対の悪いことは、自然に排除するようになります。これが、「差別」を生み出します。つまり、「悪い」状態にある人に対する無関心が、「差別」だからです。これが、少年たちに潜在的なイライラを植え付けている、という気がしてなりません。少年たちの問題行動が起こるとすぐに対策が講じられるのですが、それはほんとうの解決にはならないと思います。人間の持っている「良いこと追求」の弊害、つまり聖書で言う「罪」の問題も見据えなければ、かえって不満や不安をかかえている人たちを押し込めるだけになります。子どもたちが問題だ、と言っている大人たちの方が問題なのです。

人は、道徳だけでは救われません。道徳は、ひとつの基準、目安、あるいはマニュアルに過ぎません。マニュアルは、必要ですが、マニュアルにこだわる医療が「人間」を見失って患部ばかり見るようになってしまうのと同様、人生もマニュアルどおりにはならないのが常だ、ということをしっかり見据えておかなければならないでしょう。前にも紹介しました星野富弘さんの言葉を紹介します。

「もしかしたら、失うということと与えられるということは、となり同士なのかもしれません。私の「いつか……」は、少年の頃夢見たような出世や、地位との出会いではありませんでした。自分の力だけで生きていけると錯覚していた、小さな私と、大きな愛との出会いだったのです。そしてそれは、何ものにも代えられないすばらしい出会いだと思っています。」（星野富弘「風の旅」、立風書房、一九八三年四月一五日、第二八刷、「はじめに」）